様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００８２４

研究課題名（和文）Developing authentic teaching materials and activities for English conversation, based on the analysis of an expanding corpus of English spoken as a lingua franca between Japanese and cultural others

研究課題名（英文）Developing authentic teaching materials and activities for English conversation, based on the analysis of an expanding corpus of English spoken as a lingua franca between Japanese and cultural others

研究代表者
ブラウン　アイヴァン（Brown, Ivan）

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：８０４３６７７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：以前の科研費で開始された英会話コーパスに基づいて、今回のプロジェクトでは、日本人英語学習者の英会話における相互作用能力を上達させるための学習活動デザインと教材作成に取り組んだ。この取り組みの主な特徴は、会話分析研究からの実証的結果に慎重に基づいたことであり、実際の英会話のマルチメディア資料が含まれている。有意義な成果を得た学習資料には、啓蒙活動、実践的なコミュニケーション活動、振り返り活動、学生が継続的に活用できる参考資料バンクが含まれる。さらに、活動の試行中に収集したデータには学習者の積極的な取り組みも見られた。上記全てを達成するために、コーパス自体の継続的な分析にも取り組んでいた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の学術的意義としては、教室内外の幅広いコミュニケーション状況からの会話の分析は、第二言語相互作用能力の性質と成長過程のより完全な理解に貢献することができる。特に言語的および非言語的行動及びコミュニケーション状況から生じる対話的な学びの側面において認められる。
社会的意義については、データ分析により、教室内外での会話がいかに多様であり、学習者の社会的世界でそれらがどのように相互に関連し合うかについての理解が深まった。さらに、教育と学習のために設計された活動と教材の実践的使用では、教育専攻の学生と現職の教師の両方において、言語教師教育を豊かにする効果をもたらす可能性を示している。

研究成果の概要（英文）：Building on a corpus of intercultural English conversations established by a previous KAKENHI project, in this project we worked on creating materials and activities for developing Japanese EFL learners' interactional and intercultural competence in English conversation. A chief characteristic of these materials and activities is that they are carefully based on the empirical findings of conversation analysis research, and include clips of authentic audio and visual recordings from the corpus. The substantial resulting collection includes awareness-raising activities, practical activities, ranging from short 5-minute activities to student-centered projects and self-access to reference materials. In addition, we collected recordings and other data during trials of the activities and materials, in order to examine how learners engaged with them. In order to achieve these, part of the project involved the continued transcription and analysis of the corpus itself.

研究分野：異文化間コミュニケーションと英語教育

キーワード：英語の会話　第二言語相互作用能力　異文化間コミュニケーション　英会話コーパス　会話分析　マルチメディア教材開発　オーセンティック教材　学習活動デザイン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　外国語としての英語学習者の多くは，留学や国内非日本語話者との触れ合い等の本物のコミュニケーションのツールとして英語を使用する経験が不十分である。こうした学習者において，多肢選択式の言語テストで良い点数を獲得できた人でも，自然に発生する台本のない英会話で対話するのが非常に難しいことがよくある。

(2)　この問題の解決に役立つ研究分野は，エスノメソドロジー会話分析（conversation analysis - CA）である。CA は，社会的相互作用を研究するための質的マイクロ社会構築主義的アプローチであり，自然に発生する会話の詳細な転写と分析で行われる。分析は次の仕組みを明らかにしようとする : 参加者が会話を共同構築するためにどのように互いに協力するか，どのような順番で発話するか，お互いの発話と行動をどのように自分の反応を通して理解を示すか，社会的行動をどのような相互作用の実践を通じて実行するか，会話の展開とそれにおける共通理解に関するトラブルをどのように修復するか。CA は対話データを通じて，参加者が目の前の状況，背景，お互いの関係，より広い社会にどのように向き合っているかを見ることができる。ただし，CA は，社会的カテゴリーや能力に関する既存の理論や研究者の前提に依存することと，参加者の内部心理状態についての推測も避けるものである。ますます多くの CA 研究が，会話の開始と終了，適切な方法での話題の変更，交代で話すこと，共通理解に生じた問題を修復すること，社会的行動を実施すること等に関する相互作用能力を明らかにしてきた（Sidnell & Stivers, 2013）。CA は，第二言語の相互作用能力とその成長（Brown, 2018; Gardner & Wagner, 2004; Hall & Pekarek Doehler, 2011）の研究にも適用されている。

(3)　以前の科研費プロジェクトでは，日本人と異なる文化的背景を持つ人々の間で使用される共通語としての英語（ELF）としての英会話コーパスの作成とそのコーパスデータを CA で検証することを開始した。上記全てを踏まえて今回の研究の主な課題は，既存のコーパスデータとその進化する知見を使用して，日本人学生の英語での対話能力の上達を促進できるオーセンティック教材と学習活動を作成することは可能か，である。

２．研究の目的

(1)　本研究の目的は，実際の英会話の録音・録画クリップ，啓蒙活動，実践的なコミュニケーション活動，振り返り活動を含む，日本人英語学習者の英会話における相互作用能力及び異文化間コミュニケーション能力を上達させるためのオーセンティック教材と活動を作成することであった。本研究は，商業的に販売できる様な固定的テキストや実践活動集を作成することを目的とせず，むしろ各地域の様々なニーズや状況に合わせて更新および柔軟に適応できる資料の「ポートフォリオ」を作成することであった。長期的な成功のために，学習者がこの教材や学習活動にどのように関与するのかを検証することも目的とした。

３．研究の方法

(1)　まず，関連する先行研究と教材の検証と批評を行なった。そしてそれを踏まえて，CA（あるいは応用会話分析，applied CA）は次の様に適用した：(1) 先述した既存の英会話コーパスの転写と分析を継続すること，(2) 第二言語相互作用能力を上達させるための教材及び学習活動の設計（啓蒙活動 － awareness-raising activities，実践的なコミュニケーション活動 – practical communication activities，振り返り活動 – reflection activities を含む），(3) 教室でのやり取りを段階的に記録し分析することにより，学習者の取り組みの姿勢を検証すること。

４．研究成果

(1)　①英会話コーパスの転写と分析の継続に関しては，コーパスからさらに 35 時間の録音された英会話が書き起こされた。コーパスデータの CA からは，例えば Brown (2020c)でロンドン市内の大型駅で日本人旅行者が実際にインフォメーションカウンター（図１）で情報を聞いた，そのやり取りの抜粋が図２に示している。

図１　駅の案内カウンターで，発話と共にお互いのジェスチャーで「2 days」の確認

```
19    KOT:     mhm: a- I- ↑I will: ↓uh: stay here
      kotBH:                                +  +  + ((fingers tapping on counter))
20             for: |just ↑two: days,
      kotRH:   .....| *     *     * 2 fingers up, palm-side out, *=beats
21             (0.3)
22    KOT:     so: uh:
23    RYN:     to get around london.[yeah:]
24    KOT:                          [yeah:]
      kotG:    clk--------------..|ryn--,,
      clkG:    K--->
25    CLK:     yeah the ad|vice I would ↑give you:s-
      clkG:    K--->
      clkLH:              |lift flat hand 45°
      kotG:    .|clk--->
26             if you |↑stay ↓two days: (0.2) your ↑best bet (.)
      clkLH:          |---> 2 fingers out palm-side out-----,,
27             is to ↑get (1.6) (if) you can get a travel car:d
      clkLH:   ,,,,,,,|    |-------------------|3 fingers out
```

図２　駅の案内カウンターでの問い合わせ，図１と同時点でのトランスクリプト

日本人旅行者がロンドンで２日間に何度も市内を移動するつもりで，主に４点について確認しながら結局３分間半にわたる問い合わせの中で，雑音の環境の中，聞き取りの困難，ロンドンの公共交通機関で日常的に使われる特別用語や話の共通理解等の関連で会話の修復が数回必要になったのと同時に，両参加者がお互いに豊かに相互作用能力の多くの側面を示した。その中，図２のトランスクリプトの 20 行目に日本人旅行者が「for just two days」と言いながら図１の左方のジェスチャーをし，それに対して駅スタッフが 26 行目で似た表現を言いながら似たジェスチャー（図１右方）を利用し質問前提をお互いに確認できた。同会話での分析で，単なる「問い合わせ」から「駅の使い方の授業」としての会話の種類及び参加者の役割と行動の変更過程を体系的に説明した。

② その他に，会話中の話題展開の言語的・非言語的交渉（Brown & Carroll, 2019）や会話中の繰り返されるあいづち等のような反応の特徴と会話に及ぼす効果等（Brown, 2021），実証的研究を踏まえた第二言語相互作用能力の理解がさらに深まった。

(2)　第二言語相互作用能力を上達させるための教材及び学習活動の設計に関しては，まず最新の関連先行研究までに検証した（Brown, 2020a）。英会話を行う授業科目を２学期分行うことができるだけの啓蒙活動，実践的なコミュニケーション活動，振り返り活動を作成した。

①　啓蒙活動とそのための教材としては，英会話コーパスから上記図１や図２のようなデータを利用し音声・動画クリップ及びトランスクリプト（分かりやすく少し単純化された物）を含めたスライドや配布資料を作成し，学習者と共に状況や会話の内容の理解を段階的確認したり，様々な解釈の意見交換を行なったり，ロールプレイのようにトランスクリプトを音読したりする。さらに，CA 研究で発見された会話の様々なパターンや原理等を理解させるために，以下の図３のようなスライドを作成し，学習者と共に対話的に考えていく。

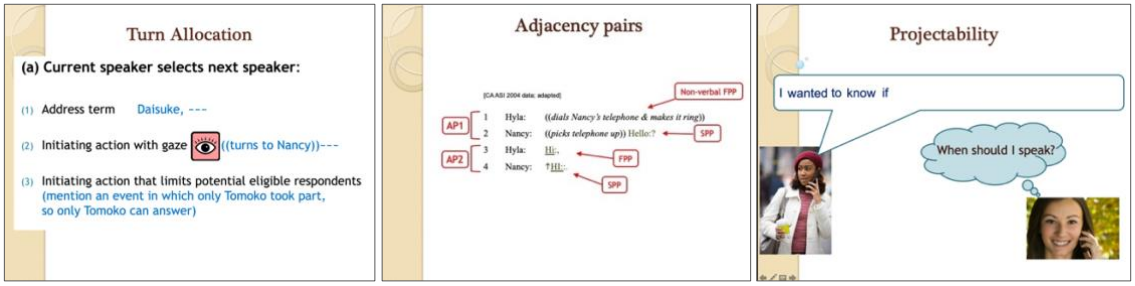

図３　啓蒙活動用スライド（順番交替システム，隣接ペア，投射可能性）

②　一部の啓蒙活動には，学習者が相互作用データを操作することが含まれる。１つの例では，ターンの構成，ターンの完了可能点，と次期ターンの関連性に焦点を当てている。話者の名前とターンの境界はトランスクリプトから削除される（図 4，左側）。教師はトランスクリプトを 1 つの声で元の韻律的特徴で読み上げる。学習者は，全体内容を個別のターンに解析し，どの話し手がどのターンに話したかを考えていく（図 4 右側に回答例）。別の例では，学習者に既存の教科書からの会話例を与え，トラブル・修復事例を追加するように求める。 図 5 は，Boon &

Harrington (2018)の会話例を使用した例であり，1 人の学習者が赤文字で修復を加えている。

The words and expressions in the dialog below are written in the correct order, but they are not arranged into turns according to speaker.
Working in your pairs, can you arrange the spoken content into lines and turns, and add the speaker initials in the "speaker" column? Don't worry about upper-case or lower-case letters at the beginning of sentences, or about punctuation (periods, question marks, etc.).
You can hit the "Enter" key to separate the lines, and you can make extra line numbers.
But don't change the order of words!

line	speaker	utterance
1		↗hey ↓↗Jen ↑hey:↘ (.) oh↘ (.) ↑Mike (.) ↓hi how ↗are you↘ ↑I'm ↓good
2		how are ↗you ↑I'm (.) uh (.) really well:, ↓I'm: actually: in a hurry: I'm on my
3		way to class↘ (.)↑um (.) but I ↑did ↘want to ask you, ↑what are you ↗doing
4		this weekend↗ ↓um (.) actually ↑nothing: I'm pretty ↑free this weekend
5		↑why↘ ↓do you have something in ↗mind ↑I was↘ really thinking about
6		going to the ↑zoo↘ um (.) I ↗have to do a p- (.) paper ↗anyway: ↘so I
7		↑thought I'd ↗go and check out the ↑animals that I'm writing a ↑paper↘ on
8		↑oh↘ that's: actually ↑cool↘ I haven't ↑been↘ to the zoo in like(.) maybe
9		↗two ↗year:s so this ↑might be a good opportunity to go ↗again↘ (.)
10		↑yeah↘ (.) I ↑know (.) ↓I (.) I ↗know↘ (.) ↓uh (.) ↗what was it (.) ↓um
11		[looks at watch] uh (.) ↗you ↗should call me later↘ (.) an:d we will set up a
12		time to go all↗right ↑perfect is your ↑number still: (.) the ↗same (.) ↑yes it's
13		still the ↘same ↑call me↗ ↑all↘right ↑perfect all↗right ↑bye: ↑bye:

[Source: Unit 4 (Invitations) from ***Discover Conversation*** by A. Boon & D. Harrington (Calico, 2018)]

Solution

line	speaker	utterance
1	M	↗hey ↓↗Jen
2	J	↑hey:↘ (.) oh↘ (.) ↑Mike (.) ↓hi how ↗are you↘
3	M	↑I'm ↓good how are ↗you
4	J	↑I'm (.) uh (.) really well:, ↓I'm: actually: in a hurry: I'm on my way to
5		class↘ (.)↑um (.) but I ↑did ↘want to ask you, ↑what are you ↗doing this
6		weekend↗
7	M	↓um (.) actually ↑nothing: I'm pretty ↑free this weekend ↑why↘ ↓do you
8		have something in ↗mind
9	J	↑I was↘ really thinking about going to the ↑zoo↘ um (.) I ↗have to do a p-
10		(.) paper ↗anyway: ↘so I ↑thought I'd ↗go and check out the ↑animals that
11		I'm writing a ↑paper↘ on
12	M	↑oh↘ that's: actually ↑cool↘ I haven't ↑been↘ to the zoo in like(.) maybe
13		↗two ↗year:s so this ↑might be a good opportunity to go ↗again↘ (.)
14	J	↑yeah↘ (.) I ↑know (.) ↓I (.) I ↗know↘ (.) ↓uh (.) ↗what was it (.) ↓um
15		[looks at watch] uh (.) ↗you ↗should call me later↘ (.) an:d we will set up a
16		time to go
17	M	all↗right ↑perfect is your ↑number still: (.) the ↗same (.)
18	J	↑yes it's still the ↘same ↑call me↗
19	M	↑all↘right ↑perfect
20	J	all↗right ↑bye:
21	M	↑bye:

図４　啓蒙活動用スライド（順番交替システム，隣接ペア，投射可能性）

Adding Repair to Textbook Dialogs

- Listen to the audio once more.
- Review what we studied about conversational repair (会話の修復).
- In the following dialog, imagine that there is some background noise (e.g., loud music / kitchen noises), or that one of the speakers is a non-native learner of English.
- Imagine various kinds of interactional trouble between the two speakers, in terms of understanding, speaking or hearing. Then, using red letters, add 4 instances of repair to the dialog.
- There is one example already, but you can delete that or change it.
- Try to include 1 instance of 4 types of repair: self-initiated self-repair; other-initiated self-repair; self-initiated other-repair; other-initiated other-repair.
- You can add any extra words, or even extra lines or extra turns.

1	Mike:	Hey, Jennifer. You're here. Good.
2	Jennifer:	Hey, Mike? What's up?
3	Mike:	Well, I hate to ask you, but I'm going to be stuck here cooking.
4	_	Everybody's going to be here in the next minute (.) I mean uh next hour,
5	_	and we still need some more things.
6	_	Could you go out and get some stuff for me?
7	Jennifer:	Pardon?
8	Mike:	Could you go get some stuff?
9	Jennifer:	Sure, what do you need?
10	Mike:	Just like, you know, regular sodas, the usual – cake, and stuff like that.
11	Jennifer:	((pause))
12	Mike:	I mean regular sodas and cake.
13	Jennifer:	You mean coke?
14	Mike:	Oh, right, coke.
15	Jennifer:	OH, okay, like two : um
16	Mike:	Two liters but maybe get like four bottles?
17	Jennifer:	Yeah, sure. I'll head out now.

図５　既存の会話例にトラブル・修復事例を追加する活動

Syllabus for English Conversation

1. Orientation; Openings
2. Closings
3. Turn-taking & Responses
4. Polar questions
5. Short answers
6. Invitations
7. Preference
8. Requests
9. Getting help by telling trouble
10. Self-repair
11. Other-repair
12. Agreeing & disagreeing
13. Topic-change
14. Story-telling
15. Consolidation

図６　会話の授業の週毎流れ

③ 英会話を行う授業科目の１学期分の週毎に設計する場合，図６は学部１年生用の例である。会話の現象・原理毎に，それぞれに啓蒙活動と実践的なコミュニケーション活動の両方が含まれる。また，学習者の主体的で活発な学びを重視し，啓蒙活動，実践的なコミュニケーション活動，振り返り活動の全てを統合的な設計する目的で，ガイダンス資料を元に学習者が主体的に授業内外英会話活動を企画し実行し，録音・録画していく。これにより，各学習者は，英会話録音ポートフォリオ（Portfolio of recorded interactions）を構築する。これに加え，先述の様な啓蒙活動を含む教師が先導するワークショップ（Workshop activities），会話実践を中心にした言語材料の参考資料（Building up linguistic resources）及び振り返り活動と自己評価を含むメタ語用論的活動（Meta-pragmatic activities）の全てを取り入れたプロセスモデルは図７に示されている。

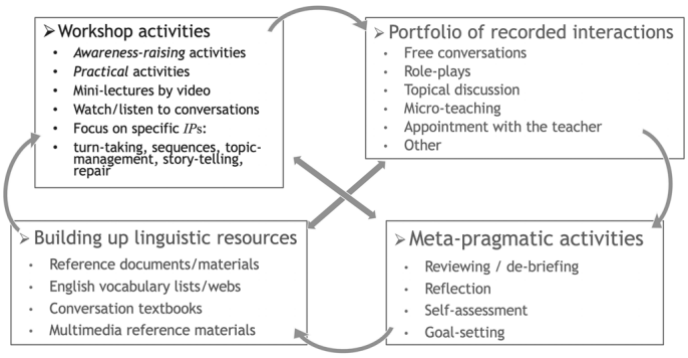

図７　英会話の学習活動の過程モデル

(3)　教師と学習者との間の教室でのやり取りを段階的に記録し分析することにより，学習者の取り組みの姿勢を検証することに関しては，授業内外英会話コーパスに 100 時間以上の授業関係英会話の録音・録画を加え，第二言語相互作用能力の成長過程の理解がさらに深まった。その活用の際の教室内やり取り及び授業外の課題としてのやり取りの録音も分析し，学習活動と教材を評価し改善した。英語での会話を含む 3 つの授業科目からのデータが分析とプログラム評

価のために収集された。

① Brown (2020b)は，上記のようなプロセスを通じて収集されたデータを分析した。 本論文は，参加者が相互作用の過程で「英会話をする」という概念に関連する志向を共同で構築したいくつかの方法について説明する。これには，学習者同士の会話に埋め込まれた教材で触れ合った日常的表現の自発的なパロディ，使用可能な言語の相対的な位置状況への志向，共同単語検索，日常生活の側面，過去と未来に関するアドホックな討論，会話におけるスキルと行動に関する明確な発言が含まれる。

② Brown & Takeuchi (2019)では，英会話とアカデミック・ライティングの指導を受けた 5 組の大学院生が英語で行った，英語のエッセイに関するピア・フィードバック・セッションが分析された。CA により，相互作用における建設的で助言に焦点を当てた批評行為の開始のあり方とそれに対する様々な反応のあり方を明らかにした。また，批評の招待・引き出しの相互作用的な特徴も明らかに説明した。教育的示唆としては，期待以外のターン形式を学習者に幾つかの困難が含まれており，外国語としての英語学習者の自己発言と相手の発言の解釈における潜在的な問題を挙げている。

(4)　本研究からの改善点としては，実践において，学習者が主体的に英語会話プロジェクト（計画セッション，本番とその録音，振り返りセッション）を行う際，より効果的な討議質問と模範的な見本を必要としている。本研究の予想外の側面には，ソーシャルディスタンスを保って英会話をすることと Zoom ミーティングの課題と新たな機会という点で，COVID-19 パンデミックが含まれていた。本研究はまた，現職の学校教員のための様々な講習や研修及び教育専攻の大学院生の研究の新しい開発を刺激しており，異文化コミュニケーション状況，ロールプレイトレーニング，非言語的行動とコミュニケーション不安，言語教室でのコード交換，および言語教室での社会的カテゴリーを研究と実践において CA を活用することへの貢献が期待できる。

＜引用文献＞

Boon, A., & Harrington, D. (2018). *Discover conversation*. Calico.

Brown, I. B. (2018, May 17). *Education for interactional competence in second languages: Some data from conversation-analytic studies and student-centered projects with implications for teacher education* [Paper presentation]. International Society for Teacher Education (ISfTE) 38th International Seminar, hosted by Joetsu University of Education, Joetsu City, Myoko City and Itoigawa City.

Brown, I. B. (2020a). Applying conversation analysis to the development of interactional competence in a second language: A review. *Bulletin of Joetsu University of Education, 40*(1), 275−284.

Brown, I. B. (2020b). EFL learners' interactional co-constructions of "English conversation": Some preliminary observations. *Joetsu English Studies, 17*, 1–15.

Brown, I. B. (2020c, August 29). *From information service to ad-hoc instruction: Multimodal L2 talk-in-interaction at a railway station* [Paper presentation]. 13th Annual Convention of the JACET Kanto Chapter (online).

Brown, I. B. (2021, March 28). *"Yeah yeah yeah" and other types of triple-pulse vocalizations in talk-in-interaction*. Paper presented at the *4th Symposium on L2 Interaction* (CAN-Asia), online.

Brown, I. B., & Carroll, D. (2019, May 25). *Multimodality and negotiation in an L2 information-desk service encounter* [Paper presentation]. *3rd Symposium on L2 Interaction* (CAN-Asia), Ewha Womans University, Seoul.

Brown, I. B. & Takeuchi, A. (2019). Constructive criticism in talk-in-interaction: Experienced Japanese EFL learners' peer-feedback sessions on English essays. In L.U. Takeda & M. Okugiri (Eds.), *A pragmatic approach to English language teaching and production* (pp.109−140). Kazama Shobo.

Gardner, R., & Wagner, J. (Eds.) (2004). *Second language conversations*. Continuum.

Hall, J. K., Hellermann, J, & Pekarek Doehler, S. (Eds.) (2011). *L2 interactional competence and development* (pp.1–15). Multilingual Matters.

Sidnell, J., & Stivers, T. (Eds.) (2013). *The handbook of conversation analysis*. Wiley-Blackwell.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Ivan B. Brown	４．巻 17
２．論文標題 EFL learners’ interactional co-constructions of “English conversation”: Some preliminary observations	５．発行年 2020年
３．雑誌名 上越英語研究 (Joetsu English Studies; ISBN: 978-4-9905960-5-7)	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Ivan Brown; Donald Carroll
２．発表標題 Multimodality and negotiation in an L2 information-desk service encounter
３．学会等名 Conversation-Analysis-Network Asia (CAN-Asia): 3rd Symposium on L2 Interaction, Ewha Womans University, Seoul, Korea.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ivan Brown
２．発表標題 Education for interactional competence in second languages: Some data from conversation-analytic studies and student-centered projects with implications for teacher education
３．学会等名 "International Society for Teacher Education" (ISfTE), 38th International Seminar, Joetsu-Myoko-Itoigawa（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Ivan Brown
２．発表標題 From information service to ad-hoc instruction: Multimodal L2 talk-in-interaction at a railway station
３．学会等名 13th Annual Convention of the JACET Kanto Chapter (online)
４．発表年 2020年

１．発表者名 Ivan Brown
２．発表標題 “Yeah yeah yeah” and other types of triple-pulse vocalizations in talk-in-interaction
３．学会等名 Conversation-Analysis-Network Asia (CAN-Asia): 4th Symposium on L2 Interaction (online)（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Brown, I.B; Takeuchi, A	４．発行年 2019年
２．出版社 風間書房	５．総ページ数 32
３．書名 (6th chapter) "Constructive criticism in talk-in-interaction: Experienced Japanese EFL learners’ peer-feedback sessions on English essays" In L.U. Takeda & M.Okugiri (Eds.) "A Pragmatic Approach to English Language Teaching and Production" (pp.109-140).	

〔産業財産権〕

〔その他〕

上記「国際共同研究」の補足としては、研究代表者の大学と香港浸会大学とのオンライン連携を行なった。本科研費プロジェクトにおけるデータ収集の一部として、学習者同士の国際Zoomミーティングを通じた英作文に関する英語で行う教授・学習的やり取りの録画・録音を行なった。その目的は録音したZoomミーティングを分析し、英語で行う国際Zoomミーティング（英作文のピアレビュー）に関する教育的示唆を引き出す。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	ＣＡＲＲＯＬＬ　ＤＯＮＡＬＤ (Carroll Donald) (20290596)	四国学院大学・文学部・教授 (36201)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	エルダトン　サイモン (Elderton Simon) (30512066)	新潟県立看護大学・看護学部・准教授 (23101)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	荒野　侑甫 (Arano Yusuke)	千葉大学	
研究協力者	竹内　綾華 (Takeuchi Ayaka)	下館第一高等学校	
研究協力者	黎　國雄 (Lai Tony)	香港浸会大学・人文・社会科学系・准教授	
研究協力者	パウ　ジャキー (Pow Jacky)	香港浸会大学・人文・社会科学系・准教授	
研究協力者	チャン　ジャキー (Chan Jackie)	香港浸会大学・人文・社会科学系・講師	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 "Incorporating Illustrations Into Transcripts" (Yusuke Arano, at CAN-Asia, Seoul)	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 "Talking the Talk: Doing and Writing Conversation Analysis" (Donald Carroll, at CAN-Asia, Seoul)	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	香港浸会大学			